

日本労働年鑑 第57集 1987年版
The Labour Year Book of Japan 1987

第四部 労働組合と政治・社会運動

III 政党の動向

5 民社党

3 大会・中央委員会

(2) 第三一回定期全国大会

大会経過

民社党第三一回定期全国大会は、八六年四月二四～二五日、東京・九段会館で開催され、本部役員・代議員など六二八人が出席した。大会では、党歌斉唱、開会あいさつ、議長団選任などのあと、塚本委員長があいさつした。つづいて、竹入義勝公明党委員長、山口敏夫新自派幹事長、江田五月社民連代表、宇佐美忠信同盟会長、藁科満治中立労連議長、小松雅雄民社研議長、ラモン・ペドロサ・フィリピン民主社会党外交委員長らが来賓としてあいさつした。このあと、党務報告や行動綱領委員会中間報告などを承認し、一九八六年度運動方針、組織活動方針、政策大綱などの議案が提案され、質疑のあと、それぞれ分科会に付託された。

第二日目は、午前中、分科会での討論がつづき、午後、全体の会議での分科会報告のあと、それぞれ満場一致、原案どおり承認された。党員表彰、「大型間接税の導入阻止と所得減税の早期実施を求める決議」など五つの決議(決議は『週刊民社』八六年五月九日付を参照)の採択などの後、参院選候補者紹介とつづき、さらに藤井選対委員長が「公認五五人、推薦一人の計五六人を、第一次公認・推薦候補者として決定した」と述べて一人一人の参院選候補者を紹介した。大会は最後に、塚本委員長の音頭で「ガンバロウ」を三唱して閉幕した。

委員長あいさつ

大会冒頭あいさつにたった塚本委員長は、党員数が結党以来最高となった事実を紹介しつつ、「党の政治目標を明確にし、党のイメージを鮮明にすることが求められている」として、「昨年の大会で決定された運動方針にもとづき、七月から行動綱領委員会を、大内書記長をキャップにしてスタートし、約八カ月の討議をへて、本大会にその草案を出す運びとなった」ことを報告した。また、解散・総選挙をめぐる政局については、(1)定数は正なしの解散は行政権の濫用、(2)大義名分がない、(3)ダブル選挙は憲法違反の疑いがある、(4)マルコス疑惑の真相解明を遅らせるなどの理由をあげて、解散・総選挙は「党利党略、派利派略にもとづくもの」と断じ、「与党内の良識派にも訴え、断固たる姿勢と決意で、今後の政局に対処する」ことを明らかにした。

さらに、党大会直前に明らかになった燃糸工連疑獄については、「横手代議士みずからが、はっきりと潔白を主張しており、また、現在までの、われわれの調査でも、何らやましい事実がない」と強調した。しかし、同時に、「党の名誉と信頼が著しく損われたことは否定できず」、「国民の前で、疑惑の

眼が向けられたことは、悲しみに堪えず、党员および全国民に、深く頭を垂れたい」として、「結党以来の試練」を乗り越えるために全党が団結することを訴えた。塚本委員長あいさつの全文は『週刊民社』八六年五月二日付に掲載されている。

日本労働年鑑 第57集 1987年版

発行 1987年6月25日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2001年8月1日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1987年版(第57集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
